



図1 南郷大東遺跡の導水施設（北から）  
（転載許可：奈良県立橿原考古学研究所）

ふるさと御所

文化財探訪

其の三十

古墳時代〈18〉

葛城氏の盛衰

南郷遺跡群②

葛城氏と

(7)

生涯学習課 文化財係

☎内線696



図2 導水施設での祭りのようす（佐々木玉季氏画）  
（転載許可：奈良県立橿原考古学研究所）

今も昔も水の大切さは変わりません。清水の流れが絶えることの無いよう、人は太古の昔からさまざまな形態の水辺の祭りを行ってきました。水辺の祭りは古墳時代に入ると複雑さを増し、その祭式の要請に呼応して専用の施設が設けられるようになります。

その典型として広く知られるのが、まさに南郷大東遺跡で検出された5世紀後葉の事例（図1・2）です。石で護岸した堰堤に貯められた清水は、木樋を通して掘立柱建物内に入った後、一旦槽に溜まり、導水管を経て木樋へと排水されます。掘立柱

建物は板を柱間に落とし込むかたちで板壁とするもので、さらに建物の周りは垣根（おそらくは柴垣）で囲われていますので、外部からは中の様子を伺い見ることはできない構造でした。

出土した木製品には、蓋、翳、椅子、琴（図3）、刀形、盾などがあります。蓋と翳はともに貴人の頭上に翳す道具です。盾を持った兵士によって守られたこの施設内では、椅子に腰掛けた貴人が流水を用いて祭りを行い、そこでは琴が奏でられ、その演奏に合わせて刀形木製品を用いた模擬戦のような舞が奉納されたことでしょう。

実はこの種の施設を模した埴輪が近畿に所在する有力古墳で出土することがあります。図4は八尾市所在の心合寺山古墳から出土したもので、やはり垣根に囲まれた中に建物があり、そして建物の内部には導水孔から続く木樋が表現され、それは反対側に開く排水孔へとつながっています。このような埴輪が近畿中北部の有力古墳で出土することは、こうした水辺の祭りが一定の普遍性を持って各地の有力首長の下で行われていたことを示します。南郷大東遺跡で



図3 導水施設から出土した琴  
（転載許可：奈良県立橿原考古学研究所）

の検出例は、その祭りの実態を知る上できわめて貴重なものです。



図4 心合寺山古墳の導水施設埴輪  
（写真提供：八尾市教育委員会）

【参考文献】 奈良県立橿原考古学研究所『南郷遺跡群』Ⅲ（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第74冊）、2003年  
（文責 藤田和尊）